広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第35号　2007.3〉

協同的創造力を育成する第５～９学年の選択教科単元モデルの開発（１）

小原　友行　　深澤　清治　　青原　栄子　　石原　直久
柳生　大輔　　藤井　志保　　荒谷美津子

１．昨年度までの研究の成果と課題

昨年度までの研究では，21世紀型の「教科学力」を，「21世紀初頭の社会の変化に対応することができる確かな教科学力」ととらえ，教科の学習で学んだことを自分たちの生活の改善や社会づくりに生かしていくことができる力を大切にした。そして，各教科が共通に，４観点に加え新たな観点「協同的創造力」を掲げた。

これは，「単に知識や技能を覚えるのではなく，共通の目的に向かって他者とかかわりながら，習得した知識や技能を生かし，新たなものを創り出していく力」である。換言すれば，従来の４観点からなる教科学力を身につけた上で，それらを生かしながら，新たな文化を子どもたちが協同で創造していくような力である。

このような力の育成をめざして取り組んだ結果，次のような成果と課題が明らかとなった。

○「協同的創造力」を育てる小中連携カリキュラム開発が必修教科で進められた。

○異学年・異校種交流による小中合同授業や小中教員によるTTの授業が展開でき，表現型の活動的な授業が大変効果的であることが分かった。

△協同的創造学習を実現するための方法が十分確立されるまでには至らなかった。

△カリキュラムの中に「協同的創造力」を一部導入することはできたが，評価基準の作成まではできなかった。従って，その検証が不十分であった。

２．研究の目的

本研究は，第５～９学年で，選択教科で「協同的創造学習」を展開し，「自分たちで文化を創造する」子どもが育つ学習のあり方について実証的に研究を進め，多様な単元モデルの開発に努めることを目的としている。

３．研究の方法

(1)「各教科が，本部会の構想を受けてねらいを明確にした選択教科の教科構想・単元構想を持って授業を行ったことは，協同的創造学習の単元モデルの開発となったか。」という視点で，子どもたちの活動の様子をパフォーマンス評価するとともに，共同研究者の先生方と分析・考察する中で，よりより選択教科の教科構想・単元構想について検討をしていく。

(2)「選択教科の授業づくりにおいて，必修教科の発展的な内容を取り扱い，一連の学習過程を踏みながら，活動や成果に価値を見いださせたことは，子どもたちに『自分たちで文化を創造しよう』とする協同的創造力を育むことができたか。」という視点で，子どもたちの自己・相互評価と教師による評価，及び子どもたちへの意識調査などを実施して，成果と課題を明らかにしていく。

４．研究の内容

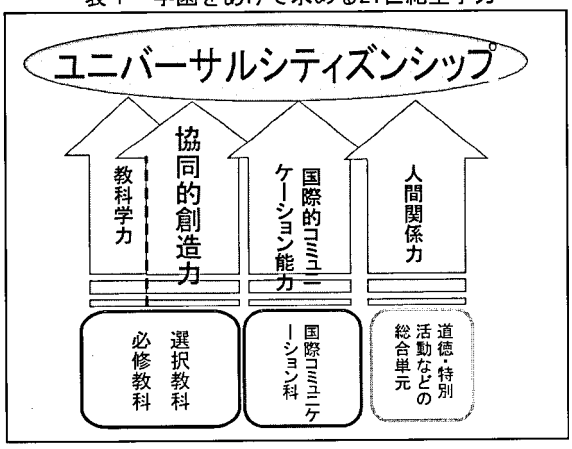
(1) 協同的創造力

私たちは，これまで協同的創造力を含めた教科学力を21世紀型教科学力と呼んでいたが，国際的コミュニケーション能力，人間関係力，協同的創造力の3つを21世紀型学力と呼び，この３つの力を育成することで学園全体の研究テーマである「ユニーバーサルシティズンシップ（人間に必要な普遍的市民性）」を身につけた子どもを育てようとしている。

このような子どもを育てるために，本部会では必修教科の教科学力を生かしながら，新たな文化を子どもたち自身が協同で創造していく力（協同的創造力）を育もうと考えた。その際，お互いにコミュニケーションできる力も必要となる。そういう意味で協同的創造力は，表１のように教科学力と国際コミュニケーション能力をつなぐ力として存在する。

Tomoyuki Kobara, Seiji Fukazawa, Eiko Aohara, Naohisa Ishihara, Daisuke Yagyu, Siho Fujii, Mituko Aratani: Development of unit for elective subject from fifth to ninth grade to improve cooperative crearion (1)

表１　学園をあげて求める21世紀型学力

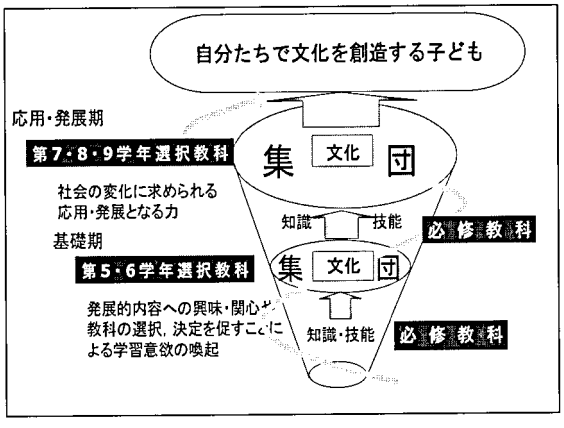


また，表２に示すように，小学生と中学生では選択教科において，経験の有無から段階がある。

小学校の第5・6学年を基礎期ととらえ，まずは，必修教科の発展的な内容に興味・関心を示したり，自分で学習したい教科を選択し，決定したりすることで自己効力感を高め，学習意欲を喚起することが大切であると考えた。そして，その力が基盤となって，中学校第７学年からは，必修教科で習得した知識や技能といった教科学力を生かしながら，社会の変化に求められる応用・発展となる時期ととらえ，小学校の必修教科で身につけた知識や技能といった力を生かしながら，選択教科で応用・発展させ集団の中で共有することによって，自分たちで文化を創造する子どもを育てていこうと考えた。

これらの力は「協同的創造学習」において育むことができる。

表２　協同的創造力の構図



そこで，本年度は，小中で連携を図りながら協同的創造学習の研究を推進していこうとしたのである。

(2) 研究テーマ

自分たちで文化を創造する
子どもを育てる
「協同的創造学習」
－第5～9学年の選択教科単元モデルの開発－

(3) めざす子ども像

私たちは，子どもたちに選択教科「協同的創造」の時間の中で，「学んだことを生かし→集団で学び合いながら→自分たちの新たな文化を創り出す」という過程を歩ませることで協同的創造力を身につけた子ども，すなわち「自分たちで文化を創造する子ども」を育てようとしている。

５ヶ年に渡ってつけたい力は，次のように整理した。

表３　めざす子ども像とつけたい力

協同的創造学習の過程	第5・6学年（基礎期）	第7・8・9学年（応用・発展期）
学んだことを生かし	課題を解決していくために，必修教科で習得した知識や技能を使い，	課題を解決していくために，必修教科で習得したり，生活の中で培ったりした知識や技能を駆使し，
集団で学び合いながら	5・6年の異学年集団の中で自分の意見を出し，様々な価値観から学び合いながら，	学年集団の中で自分の意見を出し，様々な価値観から学び合うことで，更に新しい価値観を見つけ出しながら，
自分たちで文化を創り出すことができる	よりよい学校生活や文化を創り出そうとすることができる。	よりよい学校・社会・家庭生活や文化を創り出すことができる。

(4) 選択教科「協同的創造」の教育課程上の位置づけ

これまで中学校で実施していた選択教科は，自分で教科を選択するので主体的な学習が促進できた。発展的な内容を取り扱ってはいるのだが，必修教科のねらいとそう変わらなかった。

そこで，必修教科のねらいと区別し協同的創造力育成のための時間として選択教科を位置づけた。時間の捻出は，小学校の第5・6学年は現行の学習指導要領の「総合的な学習の時間」の中から15時間，中学校の第7・8・9学年は「選択教科」から，それぞれ20時間・50時間・120時間を「協同的創造」の学習に充てた。

表４　教育課程上の位置づけ

	第5･6学年（基礎期）	第7･8･9学年（応用･発展期）		
時間枠	月曜日のクラブ･委員会のない週の6校時に固定する。	火曜日と木曜日を原則とする。		
総時間数	15時間	20時間	50時間	120時間
実施教科	国語・社会・算数・理科・音楽･図画工作・体育・家庭の8教科	音楽・保健体育･技術家庭	国語・数学・社会・理科・英語	国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健体育・英語

(5) 協同的創造学習の特徴

選択教科「協同的創造」で展開される協同的創造学習には，次のような特徴がある。

①必修教科の発展型

選択教科では，子どもたちが必修教科の発展的な内容に興味・関心を持ち，自分で教科を選択し決定していく。そうすることで，自分の得意なことが生かせるといった子どもの特性に基づいて，学習を展開することが可能となり，子どもたち一人ひとりの個性を発揮させたり，より深化・発展させたりする授業が展開できる。

②文化創造の学習

子どもたちは，課題追求に向けて，多様な考え方や価値観を持って取り組み，学びの過程（プロセス）やその学習を経て「文化」を獲得していく。「文化」とは，新たな価値を見いだし，自分にとっても他者にとっても社会にとっても，意味のあるものを創り出していこうとするものだからこそ，創造的な学びなのである。

③プロジェクト型の学習

新たな文化を創造する学習を展開していこうとすると，次のような学習過程を踏む必要がある。

これは，課題追求型・問題解決型の学習でもあり，他者とのコミュニケーションを大事にした協同的な学びでもある。

表５　協同的創造学習の学習過程

①　課題意識を持つ
②　創造的な学び
③　学習を振り返る
④　発信する
⑤　自己実現に向けて拓く

④集団による協同的な学びの構築

基礎期の小学校第5・6学年は，表現型の活動に有効な合同で，応用・発展期の中学校第7・8・9学年は，学年単位の集団で進める。このような集団の中で，子どもたちは自分とは異なる考えに触れ，新たな知識や技能，高い価値を獲得して，一人ひとりの思考や表現を深めることができると考える。

４．授業の実際

紙面の都合上，小学校の国語科と社会科，中学校の家庭科と選択教科発表会を紹介する。

(1) 小学校選択教科「国語科」

①協同的創造学習部会構想と選択教科「国語科」のねらいの関連

共通の目的に向かって，他者とかかわりながら，習得した知識や技能を生かし，新たなものを創り出していく力を育むために，「ことば☆パフォーマンスに挑戦！」というテーマで，言葉をもとにした表現活動を行おうということを，第１次のガイダンスで子どもたちに投げかけた。その後，国語を選択した子どもたち（５年生８名，６年生４名　計12名）で，具体的にどんなことをやりたいかを話し合い，自分たちが考えたストーリーをもとに脚本を作り，見る人が楽しめるような劇にして発表会をすることになった。これは，創作文を書くことと「登場人物の心情や場面についての描写など，優れた叙述を味わいながら読むこと」という国語科の第5・6学年の「読むこと」の発展として，表現の効果をとらえながら音読したり上演したりすることによって，子どもたちの自己表現力を育てることができるものである。また，劇づくりは，子どもたちが大変好む活動でもあるため，子どもたちの意欲的かつ協同的な学びが期待できる。

②単元計画

◇　**単元名**　**「脚本を作って，劇を5･6年生さんに見せよう！」**（総時数　14時間）

◇　**目標**

【関心・意欲・態度】

○　身の回りの言葉に興味や関心を持ち，自分たちの思いを進んで表現しようとする。

【技能】

○ 詩や物語の創作や脚本作りの活動を通して，自分たちの思いを伝えるために，言葉を吟味しながら表現する力をつける。

【協同的創造力】

○ 友達の思いを大切に受け止めながら，みんなで協力して，言葉による表現をつくりあげる。

◇ 学習計画

第１次　ガイダンス　・・・１時間
第２次　１年間の学習計画を立てよう・・・１時間
第３次　ストーリーを決定しよう　・・・１時間
第４次　脚本を作ろう　・・・３時間
第５次　劇の練習と準備をしよう　・・・６時間
第６次　発表会をしよう　・・・１時間
第７次　ふり返りをしよう　・・・１時間

③活動の様子

【学習計画を立てよう】

＜第２次　１年間の学習計画を立てよう＞

第１次のガイダンスを受けて，国語を選択した子どもたちで，それぞれがやってみたいことを出し合い，みんなで協力しながら他の人にも喜んでもらえるような学習という観点で話し合って，１年間の学習計画を立てた。子どもたちからは，「みんなで脚本が作れるなんてうれしいです。選択教科を国語にしてよかったです。」という感想も見られ，意欲的な様子がうかがえた。

＜第３次　ストーリーを決定しよう＞

１年間の学習の方向性が決まったところで，夏休み中に，劇にしたいお話のあらすじを各自で考えてきた。その結果，「６人のようせい」「小さな命を救え!」「名探偵さぶろう」「魔法の赤いリボン」「星に願いを」など，どれも夢のある作品が集まった。その中で，全員が登場できて5・6年生に楽しんでもらえるように，A児の考えた「魔法学校のボウケン!!」という作品をもとにして，他の作品のアイデアも盛り込みながら，みんなで脚本を作っていくことにした。授業後には，「みんなしっかり自分の意見を言えていたので，よかったです。」「場面ごとに脚本を作っていくところがすごく楽しみです。」などの感想が見られた。

＜第4次　脚本を作ろう＞

まず，第５学年の国語の教科書で，ト書きなど脚本の作り方を確認した。次に，劇のあらすじをもとに内容について共通理解を図った後，全体を５つの場面に分け，2～3名のグループで脚本作りに取り組んだ。「みんなグループで案を出し合って，一生けんめい脚本を作っていました。楽しい劇にしていきたいです。」という感想に見られるように，どのグループもお互いの考えを出し合いながら，大変楽しそうに脚本作りに取り組んでいた。しかし，その脚本で実際に劇ができるかどうかは，検討の余地がある。原稿を読み合わせる中で，お互いにその都度吟味していくことが必要である。

現在は，脚本がほぼ完成し，役割分担を決めて子どもたちが作った脚本をもとに劇の練習や準備を行い，5・6年生を招いて劇の発表会を行う予定である。

表６　国語選択者全員で作った脚本の一部

第１場面	
ナレーター	ここは，魔法学校３年１組の教室。
（ジョセフ先生登場。一同ザワザワ。）	
ジョセフ先生	卒業日が近づいてきたな。今日は，卒業試験のグループを決めるのと説明をする。 いいな。
ピーター	女ばっかだったら，やだなあ。
ルル	静かにしようよ！
マニィー	ルル，こういう時は静かじゃなくても，ジョセフ先生の耳に聞こえないまじないを かけときゃいいの。
（マニィー，ルル，ピーター，ポーズをとる。）	
ダイナ	あー，いっしょだといいねぇ。
（後略）	

(2) 小学校選択教科「社会科」

①協同的創造学習部会構想と選択教科「社会科」のねらいの関連

選択教科「社会科」では，本学園の教育目標でもある「自ら伸びよ」をもとに，子どもたち一人ひとりが共通の目的に向かって自分の考えを明確にもち，お互いの考えを比較，統合して，役割を分担しながら活動している。今年度は「わたしたちの学園を見つめ直し，よりよい学園にしていこう」というテーマのもとに，「三原学園改造計画」という単元を設定した。子どもたちは，いくつかのプランの中から活動の見通しがもて自分たちの力で達成できそうな４つのプランを選定し，グループに分かれて活動をしている。

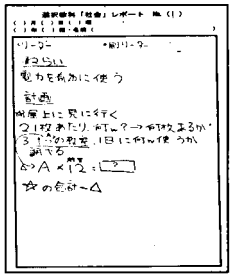
②単元計画

単元名「三原学園改造計画」　(総時間数　15時間)

第１次　オリエンテーション
第２次　グループ毎に調べ活動
第３次　プラン案発表会

③活動の様子

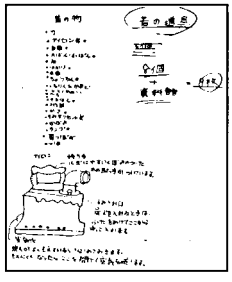
○(Ａグループ　３名)**『附属学園電気代見直しプラン』**



三原学園では，小学校と中学校の屋上に太陽光発電パネルが設置されており，昼間は学園で使用している電力の一部をまかなっている。

そこで，Ａグループは学園の年間電気代と太陽光発電の現状について様々な資料をもとに調べ，より効率的な発電システムや，節電方法について考え，三原学園に最適な『電気代倹約プラン』を提案し，みんなに学園の現状について考えてもらおうと活動している。

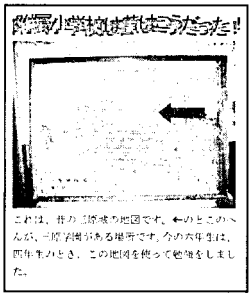
○(Ｂグループ　５名)**『歴史資料館リニューアルプラン』**



三原学園には歴史民具資料館があるが，あまり利用されていない。

そこで，Ｂグループは資料館を「みんなが行きたくなる」「実際に使って学んだり考えたりすることができる」ような，『わたしたちの博物館』にリニューアルすることを考えた。子どもたちは歴史資料館の収蔵物を調べるとともに，自分たちでテーマを設定し，それに応じた資料を収集したり，展示の仕方を考えたりしている。

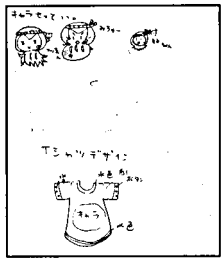
○(Ｃグループ　４名)**『附属学園未来ビジョン広報プラン』**



三原学園の前身は広島高等女子師範学校である。しかし，学園の子どもたちや保護者も含めて市民の方々に，三原学園の長い歴史や伝統はあまり知られていない。

そこで，Ｃグループは三原学園の歴史や「三原学園ならではのもの」について写真や図などを使いわかりやすくまとめ，附属の関係者だけではなく多くの市民の方々にも三原学園のよさを知ってもらうとともに，「三原市と三原学園のこれから」についてもプランをたて，多くの人々に三原学園のことを考えてもらえるように活動している。

○(Ｄグループ　10名)**『附属学園オリジナルグッズ製作プラン』**



子どもたちは，三原小学校の姉妹校であるウォールコーツ小学校（アメリカ）にはオリジナルマスコットがあることを参考に，自分たちも三原学園オリジナルマスコットを作成しよう考えた。

Ｄグループでは，“幼小中一貫”といった三原学園の特色をもとにオリジナルマスコットを考案し，それを用いた三原学園オリジナル商品をつくりだそうと活動している。オリジナル商品をつくりだすことで，わたしたち一人ひとりの学園への愛着を深め，学園全体の連帯感を高めるとともに，三原学園を訪れるお客様へおみやげとして贈り，三原学園のよさを広く知ってもらおうと考えている。

(3) 中学校選択教科「家庭科」

①協同的創造学習部会構想と選択教科「家庭科」のねらいの関連

選択教科「家庭科」では，必修の教科で学習した内容をもとに，とくに一人ひとりの個性やアイディアを発揮させながら「多様な価値観の中から学び合い（生活知の交流），新しい価値観を見つけ，さらに生活を科学的に認識し（学校知の獲得），それをもとに生活を創りあげていくことのできる力」をより深化・発展させることをねらいとした。その中で創造されたものを「新たな文化」と考えた。

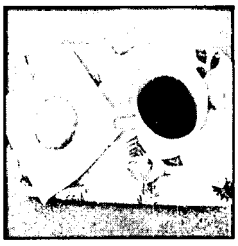
まず学びの内容について課題意識を持ち，自分たちで活動内容やその方法を模索し試みる。そして，その成果を他者（この単元ではお客様）とのコミュニケーションを大切にした取り組みの中で生かし，最終的には社会に向けて自分たちの学習の成果を発信する営みへと発展させた。具体的な学習内容のねらいは次の通りである。

- ○　お客様をお招きして，ティータイムを演出するにあたっての必要な知識・技術を学ぶ。
- ○　接客のマナー，お客様とのコミュニケーションについて学び，人とかかわり合う力をつける。
- ○　仲間と共に協力しアイディアを出し合い「よう

こそ○○カフェ」を協同的に創造する。

②単元計画（中学校第１学年　26名）

単元名「ようこそ○○カフェへ」～ちょっと素敵なティータイムの演出～　（総時間数　20時間）



① カフェの内容と名前の決定　グループの決定
・・・１時間

② テーブルの演出　オリジナルコースターの製作
・・・５時間

③ 手作りのお菓子や飲み物の入れ方の調理実習
・・・５時間

④ テーブルマナーやコミュニケーションの演習
・・・１時間

⑤ 各グループでお招きするお客様の決定と役割分担
・・・１時間

⑥ 招待状の作成やカフェの演出　お客様を招くための事前準備
・・・２時間

⑦ メニュー決定と試し作り　各班オリジナルのテーブルの演出
・・・２時間

⑧ ようこそスマイルカフェのオープン　お客様をお招きする
・・・２時間

⑨ ふり返りとまとめ
・・・１時間

③活動の様子

1)カフェオープンまで

はじめに，どのようなカフェが人の心を和ませ楽しく過ごせるかを話し合い，意見交流を行った。キーワードとしては「笑顔・明るい雰囲気・花がある・ゆっくりできる・おいしい食べ物や飲み物」などがあげられ，名前の候補としては「ようこそフレンドリーカフェ」「ようこそスマイルカフェ」「Welcome to flower café」などがあげられた。話し合いの結果，笑顔を意識したいという意見から「スマイルカフェ」に決定した。

このカフェオープンに向けて，テーブルの演出としてコースターをオリジナルデザインで製作したり，30分間で簡単にできるクッキングや紅茶の入れ方などに取り組んだ。また，実際にお客様が来られたことを想定してのコミュニケーションを取り入れたロールプレイング活動も行った。

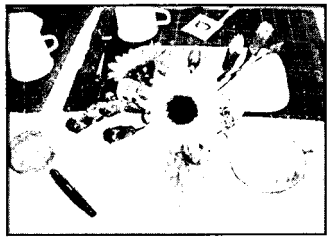
しかし，取り組みの当初は，作ることや完成させること，自分たちが楽しく作り食べることに一所懸命になり，なかなか「他者のために」という活動にならなかった。練習や実習の回数を重ねるごとに，「盛りつけをきれいにしよう」「このメニューはこのような点がいい」とアピールしたり，「この味だと相手がこのように感じるのでは?」「食べやすくするためにはもっと～したほうがいい」という意見も聞かれたりするようになってきた。

ゆべしを作ろう　南天の葉を飾ったよ

ガトゥショコラを作ろう　うまく焼けたかな

ほかほか蒸しパンを作ろう　色々な味付けにしたよ

2)ようこそスマイルカフェオープン



前日の放課後，カフェのテーブルセッティングや花を生けることなどお客様を迎えるための環境を整えた。当日は早朝より，お菓子作りの下準備を行っておいた。時間にも何とか間に合い，お客様を心持ち緊張した表情で迎えた。はじめは思ったように話すことができず，硬い雰囲気だった。しかし，お客様の紹介をグループごとに行い，全体で交流していくうちに，「スマイルカフェ」の

名の通りみんなが「笑顔」で楽しく過ごすことができていた。「相手のために」お菓子を作って盛り付け，お茶を出し，お話をしておもてなしをするということを通して，気配りの仕方，コミュニケーションのとり方，など多くのことを学んだようだ。

次に生徒の感想を紹介する。

○ 一番話したことはマナーについてです。日本では出された食べ物を全部食べるのが礼儀で一般的だと思うけど，中国ではちょっと残すのが礼儀だということを教えてもらってびっくりした。すべて食べるとまだ足りないと思われるようです。

○ 相手のことを考えながら，お菓子を作ったりお茶を入れたりという，普通とは違う授業で楽しかった。またこんなことをやっていけたらいいと思った。

○ 最初は前を向いて話すことができなかったけど，僕の趣味を聞かれて話す時はとても楽しかった。工夫したことのは話し方です。なるべく話すときお客様の顔を見て質問したり答えたりしたことです。どう接していいのか考え，色々工夫したら，お客様に気持ちが伝わり喜んでもらえて，嬉しかった。

○ 最初はカフェと聞いてお菓子を作って食べるというのがメインだと思っていたけど，だんだん相手のためにという気持ちが強くなっていった。この学習をやってよかった。

○ 相手のことを考えて，お皿やコップなどを並べることができた。紅茶用のシュガーを入れる入れ物を自分の家から持ってきて工夫してみた。会の初めはもじもじしていたけど，最後には色々とお話ができた。お客様が最近のニュースやいじめの問題について真剣に語ってくださった。いじめで死んでしまっては何の解決にもならないということなど話せた。お茶も楽しんでいただけてよかったし，小さな国際交流ができて，とても良い経験ができた。お菓子の作り方も大切だが，一番はカフェを開くにあたって相手のお客様のことを考えることがとても大事だと思った。

(4) 中学校選択教科発表会

中学校では選択教科の中で協同的創造学習を展開した。そこでは，中学生全員が自ら選択し決定した教科の中で，協同的創造力を身に付けた子どもの姿をめざしている。今後も，学年が上がっても選択教科を進めていくので，この発表会が下級生にとっては先輩達の姿，つまり自分たちの将来の姿を見つめることにつながり，上級生にとっては自分たちの頑張った姿を発表することと同時に，下級生にも先輩としての姿を伝えることになると考えた。

発表の実際は，学習内容をパワーポイントで発表する教科，ミュージカルを演じる教科，作成したものを会場に展示する教科などそれぞれの教科の特色があらわれていた。また，発表は長時間にわたったにもかかわらず，発表する者・演ずる者も，フロアで見る者も一体となってこの発表を作り上げることができた。生徒の感想には次のようなものがあった。

> 少人数だからクラスが違っていても，まとまり感がありました。何よりも自分の好きな科目を受けられるので，授業が楽しいです。選択教科ではみんなが意見を出し合えて，先生が進めていくのではなく，生徒の考えで授業が進められていたと思います。
>
> 発表会では，本番の2，3日前ぐらいまで完璧にできていなくて，どうなるのかと不安に思っていましたが，本番ではうまくいってすごくほっとしました。発表時間はとても短く感じました。7年生の大きな思い出のひとつになりました。
>
> （選択音楽を選択した7年生）

発表会は，次のようなプログラムで進行し，生徒の感想による自己・相互評価，教師による評価，保護者等による外部評価を入れて，活動や成果に価値を見いださせようとした。

【選択学習発表会プログラム】

○日時・場所　12月21日（木）5・6校時　於：体育館

司会進行：8年生の総務　・副総務

生徒体育館入場	13：35入室完了
開会宣言（総務）	13:40～13:50
副校長先生挨拶	
生徒発表	
① 発表（９年美術科） ② 発表（７年家庭科） ③ 発表（７年保健体育科） ④ 発表（９年英語）	13:50～13:55 13:55～14:05 14:10～14:25 14:30～14:50
休憩（展示作品の見学）	14:50～15:05
⑤ 発表（７年音楽科） ⑥ 発表（９年音楽科）	15:05～15:20 15:25～16:00
本日の感想 生徒３名，教師１名，保護者１名	16:00～16:20
小原先生のお話	
副校長先生挨拶	
閉会宣言（　　）	
各教室にて帰りのSHR	16:25～

○発表内容

教科名	発表内容	時間
①９年美術科	学習内容の発表 （パワーポイント）	５分
②７年家庭科	学習内容の発表 （パワーポイント）	10分
③７年保健体育科	ダンス	15分
④９年英語科	英語によるスピーチ	20分
⑤７年音楽科	ミュージカルに向けて	15分
⑥９年音楽科	ミュージカル	35分
９年数学科 8・9年社会科	学習内容の掲示発表 オリジナルマップの展示	

今年度は初めての取り組みということもあって，各教科の発表内容や学習発表会の計画などを年度当初には計画しておらず，年度途中に決定していった。早い時期に計画しておれば，見通しをもって取り組むことができたであろうし，発表会の企画・運営も生徒が主体的に行うこともできたと思われる。また，本学園の一貫教育の特性を生かして，小学生さんにも見てもらったり，将来的には小中合同で発表会を開催したりすることも可能な行事ではないかと考えている。

５．成果と課題

単元が終了していない教科もあるので，現時点までの取り組みについて研究仮説に基づいて検証をする。

(1)「協同的創造学習の単元モデルの開発となったか」について

○ 小学校では，選択教科「協同的創造」の時間を新設し，８教科開設することができた。子どもたちの興味・関心に基づいた学習内容や学習活動が創造できた。

○ 中学校では，各選択教科において１～２の協同的創造学習単元モデルが開発できた。「協同で直接体験」という観点で単元や題材を設定することで，子どもたち自身で「新たな文化」を創造していくことができた。

△ 教科の特質から，必修教科の学習内容が既に協同である教科や実際には協同的創造学習の実施が難しい教科もあった。これらを踏まえた上で，単元モデルの開発に努めなければならない。

(2)「授業づくりにおいて，必修教科の発展的な内容を取り扱い，プロジェクト型の学習過程を導入したことは，子どもたちに活動や成果に価値を見いださせることができたか」について

○ 中学校では，授業の中や選択教科発表会の際に外部評価を導入した。個々が抱いている既存の価値観を，更に集団で練り上げていったり，活動や成果に価値を見いださせたりすることに効果があった。

○ 中学校の家庭科では，活動の振り返りの場で思うように出来なかった事や，失敗した体験についても生徒自身が出し合い，意見交流する場面も見られるようになった。「スマイルカフェ」にお客様を招くということを通して，生徒自らが「自分の体験の中にある生活知」と，「新しく学んだ学校知」を統合させさらに「新たな文化」を創造し，それを地域の人々に向けて発信することができた。協同的創造学習のひとつの特色であるプロジェクト型の学習過程の繰り返しが大変有効であったと言える。

△ 必修教科の発展的な内容を取り扱ったが，選択教科との違いが見えにくい。必修教科で学習したことを生かす選択教科とするためには，必修教科の授業づくりについても同時並行で研究を進めていくべきである。

引用（参考）文献

１）21世紀型“読み・書き・算”カリキュラムの開発；広島大学附属三原学園編著（明治図書）2005